

令和4年12月6日移動教育委員会・意見交換要旨（Aグループ）

〇ICTを活用した教育について日頃感じていることについて

（参加者）子供が新型コロナウイルスへの感染で学校に行けないことがあり、その際タブレット型端末を活用するものだと期待していた。オンライン授業を受けられるものと思ったが、実際はまだそのような対応をしていただけでなくて残念だった。現状、オンライン授業が難しいという理由は何か。マンパワーになっているということか。

（参加者）オンライン授業について、教員の立場から状況をお知らせする。

緊急事態宣言が出された頃はまだタブレット型端末が配備されておらず、全国で約5%しかオンライン授業ができなかったという状況があった。浜松市は5月末か5月中にアカウントを発行して児童生徒に配付した。文部科学省では、スマートフォンなど、家庭にあるもので、何とか家庭内で学習を保障することを促していた。その時はICT機器の活用法や周知について学校は大混乱であり、オンラインでの学びを提供することがなかなかできなかった。ただ、それ以降、タブレット型端末が届いてからは、教員も使い方を一生懸命研修などで学び、子供たちも一生懸命学んでいる。

昨年度、勤務する学校では、新型コロナウイルスに感染した児童に対してオンライン授業を実施した。自分もやってみて気がついたが、子供たちを前にした授業や学習と、オンラインで行う授業の展開というのは、かなり違うため難しい。授業をライブ配信のように行くと子供が疲れてしまうため、画面越しに向けた授業は、ポイントを絞って10分程度考えさせ、後に教員が返答するという流れが多い。そのため、目の前の子供たちへの授業とオンライン授業では、別の技術が欲しいと感じている。

オンライン授業に出席した児童に感想を聞くと、黒板が見えにくかった、音声聞き取れなかったなど、満足のかない返答が多い。引き続きオンライン授業については試行錯誤していくことが必要になる。

保護者から話を聞く中と、やはり繋がっていることの安心感などがあるという意見はいただいた。ずっと家にいると大変で、退屈さも感じてしまうので、あらゆる工夫はしていきたい。

（参加者）先生方はとても頑張っていると思う。ただ、ニュースなどを見ると、絶対にマンパワーが足りていないと思う。サポートを行うICT支援員が週に1回ぐらい訪問するという話があったが、それで足りているのかどうか気になる。

私の子供の学校や周りの保護者から聞くと、学級で2人程度が休みの時は、他の子供は通常の授業を行い、休んでいる子供は家でやれることをやってくださいということがある。おそらく何年か後に改善していくものと考えているが、数人がオンラインでも行うことができる授業にしていくためには、資料などをデジタル化していかないと無理だと思う。

私の職場では、1人2人だけオンラインで参加する会議がよくある。プレゼンテーションの資料を使って説明したり、それに手書きで丸をつけたり、何かを補足したりもできる。

それを拙速に先生へ求めるのは難しいと当然分かっているが、オンライン授業の課題ができるだけ早く解決すれば良いと思う。

(参加者) 中学生の子供が中学1年生の頃から学校に通うのが苦しくなり、その後、校内の適応指導教室に通い始めた。併用しながらまた教室に戻れるようにという目的で設置されていると聞き通い始めたが、自習をすることが多く、結果的にはどんどん授業についていけなくなってしまった。

適応指導教室に通っていた時は、通常の教室と適応指導教室の連携が取れていなかったため課題の提出期限などの情報が全く降りてこない状況だった。リモート授業ができないのかという子供からの提案をしたが、1学期の段階でほぼ、タブレット型端末を使ってないそうである。コロナ禍で学年だけでも不登校の子が多くいるという現状の中で、何も動きがないというのは遅すぎではないか。

カウンセラーの先生に、学校に行けなくても、教室の状況がわかれば行こうという気持ちになるきっかけにもなると思うため、そういった授業はできないのかという話をさせていただいたが、先生方からからは、現状リモートではできないと説明を受けた。

先ほど、オンライン授業の現状について小学校の先生から説明があったが、タブレット型端末の活用が進んでいるのはごく一部の学校なのではないか。浜松市はICT化が進んでいることをニュースで取り上げられているが、その逆の進んでいない部分を見てもらわないと変わっていかないことを分かってほしい。

通常の教室と校内適応指導教室の連携だけでも、オンラインでやるなり、情報共有というものを進めていただかないと、子供たちが本当に苦しい。

先生の成長過程と子供の1年間は全然違うものであり、先生に合わせるものではない。

(宮崎教育長) つらい思いをさせてしまい申し訳ない。校内適応指導教室は、各学校それぞれ良い評判をいただいている。これまで保健室などに居場所を作りながら不登校児童生徒に対応していたため、きちんとした教室で支援ができるということは利点である。

しかし、子供の状況などは様々であり、お話をいただいたように、まだ子供のニーズにマッチングできていないことも事実である。

ICTの活用では、今年度、学校訪問しているが、やはり学校によってICTの活用に差があり、その上、学校の中でも先生によって差があることを実感している。

このことについては、教育委員会としても十分承知しているところであり、登校したらまずタブレット型端末を起動するぐらいの勢いでICTを活用した教育を進めてもらいたいと伝えている。マンパワーの課題もあり、全て良いように進めようとしても無理があるため、徐々に徐々にという形にはなっている。本来は1人のためにオンライン授業を行いたい、まだそこまで先生の力量も追いついておらず、整備も間に合っておらず、過渡期であることはご理解いただきたい。

(参加者) オンラインで見れば授業に参加していることになると思うが、その意欲が評価されない状況になってしまっている。そのような現状は、子供たちにとって傷つくことである。

(宮崎教育長) 直接、学校とも相談させていただきたい。

○支援を必要とする子供や特定分野に特異な才能のある子供への活用について

○児童生徒に求める ICT 活用能力と指導する教員の研修について

(参加者) ICT をどう活用するかは、学校に全て任されているという認識で良いのか。教育委員会から、活用方法等について指示が出ているのか。他校の保護者からは、授業参観を遠隔で見ることができたなど、様々な活用の話を聞くが、私の子供が通う学校は未だにそういうことが一度も無い。学校裁量ではなく、もっと統一感があれば良いと思うが、現状はどうなっているのか。

(宮崎教育長) 基本的には学校裁量である。学校訪問をする中で、中学校では、教科学習を中心に ICT を活用しているが、学校行事などについては、小学校の方が使っている印象である。ただ、中学校でも徐々にそのような学校が増えていくとは思いますが、現状は学校任せになってしまっている。

(参加者) ICT 機器の活用について今後各学校の対応を揃えていくという考えはあるのか。

(宮崎教育長) 考えはあるが、どの部分を揃えるというところが明確に決まっていない状況である。授業等を遠隔で行うか否かは揃えないと思うが、例えば英語では既にデジタル教科書が活用されているが、今後は英語に限らず、他の教科もデジタル教科書を使うようになっていくと思われる。授業中にずっとタブレット型端末を使う場合や、話し合いの時だけ使うという場合もある。ただ、私がいつも言っているのは、タブレット型端末はあくまでも文房具であり、ノートや消しゴム、鉛筆と同じであるということである。それを揃えるのは違う気がするが、今はやはり使う人と使わない人の差が激しいため、ご意見をいただいた通り、他の学校と比べて自分の子供の学校では ICT 機器の活用が進んでいない、というようなご意見をいただくことが多い。学校間で差がまだあるため、少しでも改善を図っていきたいと思う。

(田中委員) 2年前くらいから、各学校に学校の ICT 活用を推進する教員を配置している。その教員は ICT についてあらゆることを学びながら、学校でそれぞれ広めていくようにと研修を受けている。その教員達がチームとして学校を引っ張っていかこうとする動きがもっと活発になれば、もう少し保護者の皆様が不安に思われていることも改善していけるのではないと思う。そういった取り組みが駆け出しであるため、教育委員としても歯がゆい気持ちがある。その教員が本当に学校に還元をしていけるのかという不安もある。

オンライン授業については、しばらく通常の授業を受けていない子供に対し、突然一つの授業だけ受けさせる、ということも難しいのではないかという思いがある。そのため、学習アプリ等を活用して学習を自宅で進め、ある程度進んだらアプリで課題に取り組んで提出し、それを例えば単位として認めるというように、オンライン授業だけでは組み合わせながら、ICTを活用していくのも良いのではないかと思う。

自宅での学習が進めやすくなり、進度や範囲に合わせた進め方ができるよう、今後考えていくべき課題である。

(参加者) 学習アプリについては、個人にタブレット型端末を貸し出した上で、自習の時間にアプリに取り組んでも良いという話を先生からいただいた。オンラインやアプリを活用するのであれば、その評価の仕方についても同時に検討してもらわないと全く意味がないと思う。

(参加者) 移動教育委員会は今回が初めてということによろしいか。

(教育総務課) 今年度3回目だが、市民の皆様を対象に行うのは今回が初めてである。

(参加者) 距離や時間帯の関係で難しいが、タイミングが合えば参加したいと言っていた保護者が複数おり、オンラインで発信してもらいたいという意見があったため、伝えさせていただく。

今後、タブレット型端末を使うことが多くなってくると思うが、長時間使うことにより、子供が依存して目を酷使してしまったりとか、やりすぎてしまったりすることがないように、先生方から目の休憩の時間を取るよう促してもらいたいという意見もあったため伝えさせていただく。

将来的にデジタル教科書がタブレットに入るのは大体何年後ぐらいのことになるのか。

(参加者) 令和6年度に英語が導入される予定である。その後、算数・数学に導入を検討していくと文部科学省が通知している。

自分は、タブレット型端末を使わない日はない。そのため、子供たちはタブレット型端末を見る時間が長くなることはあるが、当然休憩時間も挟むようにしている。現在、文部科学省で利用時間が健康にどう影響するか調査中であるため、一概には言えないが、配付されたばかりの時とは異なり、子供たちの間ではタブレット型端末に対するブームが過ぎ去っている。外に遊びに行ったり、将棋をしたり、結局友達と交流した方が楽しい様子である。

デジタル教科書の良いところは、まず拡大ができる。社会科の授業で6年生は歴史を学ぶが、その中で、長篠の戦いが出てくる。武田と徳川織田の連合軍の資料を見て、児童に何か気がつくことはないか問いかけをするが、端末だと資料集も拡大して詳しく見ることができる。

また、発達支援学級では、漢字の読みが苦手な子供が一定数いるため、読み方を音声化

でき、分からない部分に線を引くこともできるデジタル教科書が期待されている。

また、家に持ち帰って学習する際に、デジタル教科書に動画教材が付いていると、資料集でなんとなくイメージするよりも、役者が演じているようで迫力がある。外国語も、発音が音声認識されるようになると、ALT の先生がいなくても学習ができるため、個人的には楽しみにしている。

(参加者) 県の取り組みだったと思うが、子供がデジタル教科書に書き込みをして、書いたものがタブレット上で先生の教卓に一括して集まり、先生が教室を行ったり来たりしなくても、個々に適切な支援ができるというニュースを見た。発達障害があり黒板を書き写す作業が苦手という子のためにも、一連の作業が一つのタブレットでできると、授業を受けやすく、理解しやすくなるのではないかと。

また、先ほどの講話の中で、デジタル教科書+教科書という話があったが、これから移行していく上で、おそらく2個使いになっていくのではないかと思い、期待している。タブレット型端末に移行できれば、教科書が軽くなるため、子供たちにとっても負担が減る。

小学校に入学した時に、ランドセルへたくさんの教科書を詰めていくことで、行き渋りをしたり、不登校になったりという話も聞いたりするため、置き勉に対して学校側がどのような対応をしていくのか気になっている。学校単位で違ったり、自分の子供を見ていると学校の中でも先生によって違ったりするのではないかと思うが、保護者としては、置き勉はありがたい。宿題に必要な教科書等は持ち帰っても、あまり使わない重たい絵の具や習字のセットなどを学校に置かせてもらえると助かる。

(参加者) 勤務する学校では、置き勉をしている。書写も絵具セットも基本的には置いて帰っている。冬休みに入る前に、少しずつ持ち帰らせている状況である。

(参加者) 規模が大きい学校は、教材が紛失しないために管理を徹底しなければならず、置き勉をするのが大変なのかもしれない。規模が小さい学校で、ずっと置いているといった話も聞いたことがある。

(参加者) 予算があれば、家用と学校用で教科書を分けるという話もある。また、アナログの教科書は学校に置いて、家からデジタルで参照するなど、インターネットアクセスするという方法もある。

(宮崎教育長) 置き勉を推奨していく方向性で良いと思う。タブレット型端末に置き換わりが進めば、そういうところも必然的に変わっていく。

先ほど話があったように、リアルタイムで子供の回答を把握しながら授業をしている教員もいる。しかしながら、ご意見をいただいているようにタブレット型端末の活用は学校によっても、教員によっても異なる。教育委員会からもっとアプローチをしていかなければならないと感じている。

(参加者) コロナ禍で兄弟のうち誰かに風邪の症状があると他の兄弟も学校に行けないことになっている。子供たちは元気なのに、学ぶ権利が奪われている。学校に行った後でも、誰か1人に症状が出ると全員帰らされてしまう。学校にいつまでその対応を続けるか聞いたところ、浜松市全部の学校が同じように対応をしているため、学校からは何も言えないという回答があったが、まだこの状況は続くのか。

(田中委員) 新型コロナの対応については、浜松市の教育委員会が決めていることではなく、全て厚生労働省からの通知に準じて対応をしている。ただ、2類から5類へと引き下げられた場合には、おそらく感染症対策は緩和されていく。今は、制限がある中で、学校側が何とか模索しながら対応している状況である。兄弟で1人がコロナウイルスに感染したが、他の子供は健康だから登校させるということを承諾するのは、なかなか教育委員会ではできないことであると思う。

(宮崎教育長) 学校に行けなかったときの学習保障については、できる限り対応していきたいと考えている。

(参加者) 小学生の子供が濃厚接触者になった際には、家でオンライン授業をしてもらった。同じ校区の中で、小学校ではその対応ができるのに、中学校では同じ対応ができないというのは、おかしいのではないか。

令和4年12月6日移動教育委員会・意見交換要旨（Bグループ）

○ICTを活用した教育について日頃感じていることについて

（安田委員）ICT担当からの説明にあったように、少しずつICT活用が進んでいると感じる。その一方で、学校ごとの差や教員による差が生じているのではないかと感じる。ICTに限らず、学校ごと教員ごとで差があることは否めないと感じている。皆さんからICT活用について、学校や教育委員会に何を求めているか、どんなことが不安なのか等、意見を聞きたい。このグループには、ICT支援員の方も参加されていると聞いている。実際の学校の様子等伺いながら、もっとこうしたら良い、ここが困っているなどの提案もいただければと思う。

（黒柳委員）私も市内の中学校に通う子供を持つ保護者の一人である。昨年度から1人1台端末が配備され、子供に活用状況を聞いたところ、最初はほとんど活用がないということだった。せっかく配備されたのにもったいないという思いもあったが、今年度は教員研修を重ねて活用がずいぶん進んできたようである。ただ、不登校児童生徒に対する支援はまだ不十分で、個別最適化された学びという段階までは至っていないと感じている。

子供からは、タブレット型端末を活用した授業は楽しいと聞いている。英語は、授業だけでは分からないことも多いようだが、タブレット型端末を活用すると自分でやってみようという前向きな姿勢になり、取り組んでいるようである。

安田委員と同様に、教員によって活用頻度や活用の仕方に差があると感じている。教員も試行錯誤しながら頑張っている状況であるため、ご理解いただきたい。

（神谷委員）私自身も保護者の一人である。1人1台端末の配備が完了してからまだ1年程であり、評価をするのは非常に難しい。教育委員会も学校も教員も子供たちも試行錯誤しながらいろいろ活用し始めたばかりである。こうした移行期は、うまくいかないこともあって当たり前なので、皆さんに意見を伺いながらいい方向になっていければと思う。

これまで机の上で教科書を使ってやってきたことを単純にタブレット型端末に置き換えるのではなく、せっかく使うのであれば違う角度からの深い学びや、楽しさが実感できる学習につながったり、学校でわからなかったことを家でもう一度考えてみたらできるようになったりできるとよい。また、教室の中でも外でも多くの人とつながって交流できたり、今までできなかったことができるようになったりすると良いと感じている。

ノートに書いていたことをなぜタブレット型端末で示すと良いのか考えると、皆で共有したり保存して振り返ったりできることだと思う。道具を使うことを目的にするのではなく、勉強の仕方が変化している時だと思うのでこれからどう確立していくかを考えていければと思う。

(参加者) 先ほど教員によっても活用に差があるという話があったが、ブラウザのことを理解されていないのか Chromebook のことをアプリと言ったり、ID やパスワードを教えてもらっても間違っていたり、なかなかスムーズにいかないことが多いと感じる。

私は、中学生の子供が不登校の状態だが、学校とのやり取りにタブレット型端末を活用していない。先月、子供が新型コロナウイルスに罹患して欠席した際も、タブレット型端末の活用の案内はなく、子供はやってみたかったと話していた。先生には、もう少し ICT を活用していただきたいと感じている。

10 月 1 日に教育委員会主催の不登校児のためのペアレントトレーニングという会議に Zoom で参加したが、最初ログインした時には 50 人の参加があったが、一度シャットダウンして、次にログインした時は 30 数名に参加者が減っていた。それから 20 数分近く声がするものの会議が開催されず、チャットでアナウンスの依頼をしても電話連絡しても反応がない状態が続いた。子供にはネットリテラシーやマナーの教育をしているが、教員も教育委員会にももう少し画面の向こう側に対するマナーを知っていただきたいと感じた。

(参加者) 授業見学して特に動画が良いと感じている。走り方や跳び方を録画して、自分の足や体の動きを確認できることは、非常にわかりやすいビジュアルの力だと思う。

ICT 活用を進めていくにあたって、実社会でもそうだが、非常に試行錯誤は多いと思う。教育委員会も教員も、失敗ありきで、恐れずにトライアンドエラーを繰り返して活用を進めていくことになると思う。保護者はどうしても学校や教員に完璧を期待してしまうところがあるが、失敗もあるけど、とにかくやっていくということを許容してほしいと保護者に伝えておくと良いのではないかな。

失敗の中には、インターネットアクセスなどの場面で、入ってはいけないところにアクセスしてしまったりすることもあるかもしれないが、だからといって最初からがんにがらめにするのではなく、失敗から学んだり、規制するラインを慎重に見極めたりすることができると思う。

(参加者) 私の子供は 1 年ほど不登校でリモート授業を受けているが、1 人で待っている時間がとても長い。保護者としては学校に行って勉強してほしい。ICT を活用するなら学校内で活用してほしい。

先日、校外適応指導教室のチャレンジ教室に参加したが、参加している子供の多さに驚いた。こんなに多くの子供が自分の勉強する場所や居場所を探しているのだと思うと胸が痛んだ。子供の居場所はやはり学校であって、空き教室や遊べる場所で過ごせるようにする必要がある。家で過ごせば自由かもしれないが、ひきこもりにつながる可能性もあるし、心の成長に大きな影響があるかもしれないと感じている。

○支援を必要とする子供や特定分野に特異な才能のある子供への活用について

(司会) 不登校支援に対して現在の取組状況等について、教育総合支援センターから事例を説明する。

(教育総合支援センター) 市内の小中学校へ、本年 4 月に不登校児童生徒に対する ICT を活用した支援について調査した。小学校では 96 校中 36 校、中学校では 48 校中 23 校が ICT 活用をしている、または考えているとの回答であった。活用の内容は、オンライン授業やタブレット型端末を使用したドリル学習、プリント配信などのほか、学校と家庭をオンラインでつないで朝の会や帰りの会を共有するなどである。

教育委員会では、校外適応指導教室においても同様に、タブレット型端末を活用して、学校と校外適応指導教室をつないで実際に授業を受けたり、朝の会や帰りの会に参加したりしている。一方で、学習や交流が強い刺激になり、不登校状態を悪化させることもある。保護者や医療と連携しながら、慎重に進める必要があると感じている。

(ICT 教育推進担当課長) ICT を不登校支援に活用するという点で、実際にはデメリットもあることから、慎重に対応する必要があると感じている。ICT 機器はあくまでも道具であり、その道具をいかに使うのかということが情報活用能力を育成するうえでのポイントになる。

タブレット型端末は、昨年 12 月に 1 人 1 台端末配備が完了したが、昨年の秋頃は 7 割程度の導入状況の中、コロナ禍で学級閉鎖になったり、濃厚接触者で自宅待機になったりという状況が多く多くの学校で発生した。その際は導入されたタブレット型端末を活用して、家庭と学校をオンラインでつないで健康観察を行ったと聞いている。まだ導入が始まったばかりで、オンライン授業ができる状態ではなかったが、健康観察として画面越しに子供たちの顔や様子を見ることで、非常に喜ばれたと聞いている。できることから一歩ずつ始めて活用慣れていくことが大事だと考えている。先ほどの話にもあったように、トライをどんどん続けて良い活用事例を見つけて、子供たちの情報活用能力を育成していければと考えている。

(参加者) 今の説明では、遠隔のコミュニケーションに ICT をどう活用するかという話も含まれると思うが、保護者と学校とのコミュニケーションに子供の ICT 機器を使う権限やアクセス権をどこまで広げられるか検討していただきたい。学校に来られない子供への支援について、保護者と教員が話す機会を持つこともあると思う。

(ICT 教育推進担当課長) タブレット型端末の持ち帰りについて、認めていく方向であるが、現在配備している Chromebook は個人の ID でログインして使用できる機器である。Google アカウントは児童生徒のみ配付している状況であり、保護者が代わりにログインしてしま

うと法律上の不正アクセス禁止法に抵触してしまう。子供がログインした状態で保護者が見守るといふ形なら使用可能だが、試行段階であり今後の検討事項とさせていただきたい。

(参加者) このままでは、そういったことを知らず不正をしてしまう状況が発生する可能性があるため、保護者に対して、アクセス権を広げていくことを検討していただきたい。

(参加者) 姫路市では、保護者用の Google アカウントが発行されて運用が進んでいる。そういう取組をしている自治体もあるが、今後の方針などはあるか。

(司会) 保護者との連絡については、さくら連絡網を活用しているがいかがか。

(参加者) さくら連絡網は、双方向ではないので活用は難しい。

(ICT 教育推進担当課長) Google アカウントはフリーで取得できるアカウントであるため、保護者が自ら取得して学校に申請し、Google meet から招待することは可能である。しかし、フリーで取得できるアカウントであることから、本当に保護者本人かどうかの確認がとれないなどの課題が出てくるため、慎重に検討しなければならない。

(参加者) さくら連絡網は双方向にならないのか。

(ICT 教育推進担当課長) さくら連絡網のアプリケーション上では難しい。双方向のやりとりができる手段の検討というご意見は今後の参考にさせていただく。

(安田委員) 双方向の連絡手段が必要というご意見があったが、1 クラス 30 人前後の学級の保護者に対して、受ける側は担任教員 1 人である。双方向のメリットはあると思うがデメリットも大きい。教員が子供と接する時間を奪ってしまうことにならないか。

学校の働き方改革の取組の一つとして、夜間の電話を音声対応学校にした。それ以前は、夜間であっても保護者からの電話は 21 時すぎまで対応することもあったし、学校の電話回線がすべて使用中の場合は、個人の携帯電話を連絡手段として使用することもあった。そうした教員の働き方に歯止めをかけるために、夜間の電話を音声対応に切り替えるという取組をした経緯があるが、双方向の連絡手段が出来たら同じような問題が発生するのではないかという懸念がある。

(参加者) 現在は、学校や教員とのやり取りは電話しか方法がない。返信は不要で一言だけ連絡したいという思いがあっても電話以外には学校とつながる方法がない。先日、子供が体調不良で一日休んだ際、先生から 19 時すぎに電話があり、体調を気遣ったあとに翌日の予定を伝えてくれた。他にも休んだ子がいれば、何人もそうした連絡をしているのだと

思う。他の連絡手段があれば、用件だけメールして済むこともあるので働き方改革になるのではないか。

(神谷委員) 普段なら、LINE や SNS で連絡してしまえば済むようなことでも、学校は個人情報やセキュリティなど十分注意しながら対応している。先ほど、参加者の方から多少の失敗は許容しないと何もチャレンジできないという話があったが、学校は、間違いがあつてはならない、情報漏えいなど絶対にあつていけないと一番慎重な方法を選んでいる。もちろんそれは重要なことだが、学校のこととなると 100%完璧にしなければならないとの考えから柔軟な発想や大胆な取組につながらないと感じる。

保護者が教員に対して求めることも多い。初任者よりベテランが良い、教科指導も上手で、生徒指導も完璧、宿題も丁寧に添削してくれる、そんな先生を求めてしまうが、求めるばかりではなく、保護者や地域もコミュニティ・スクールを活用して学校を支えることを考えてみてはどうか。ICT だけでなく、いろいろな方法で学校を支えて、よりよい学校を作っていかなければと思う。

(参加者) 子供が小学校へ入学した際、1 カ月間一緒に学校へ登校した。1 人の先生が、何人かの気になる子をケアしながら 30 人近い子供の対応をして、さらに会議にも参加してというのは非常に大変だと思う。教室にいる先生と、画面の中から授業をする先生と役割分担をして授業をする方法はとれないか。そういうシステムがあれば、1 人の教員が子供をケアしながら同時に授業するという負担が軽減されるのではないか。教室で子供たちを支援する際は、保護者などがボランティアで参加しても良いと思う。

世界的に見ても日本の教育は厳しすぎる。子供たちにもっと自由になってほしい。子供と一緒に学校に通って思ったことは、教員はリモート授業で勉強を教えて、子供たちのケアは保護者や地域のおじいちゃん、おばあちゃんが見てくれたら、もっと愛情いっぱいに育つのではないかということである。地域と協力して子供たち一人一人を見守ることができる方法を考えてほしい。

○児童生徒に求める ICT 活用能力と指導する教員の研修について

(教育センター所長) 昨年度は、Chromebook が導入されることに伴い、学習アプリの使い方、授業における ICT 活用の方法、情報モラル・セキュリティなどに関する研修を行った。各学校には、教育の情報化推進リーダーがおり、その教員に対する研修を実施することで、その教員が中心となって、各学校の教員へ伝達するという方法で研修を行ってきた。

今年度は、多くの教員が基本を習得したことから、個々の能力に合わせて、また教員のニーズに合った希望研修をより多く実施した。子供の学びは教員と相似形の学びだと言われることから、Jamboard など、Chromebook を使った共同作業を研修に取り入れて、子供も

授業でこういう学びができると実体験することを目的とした取組も行っている。

(参加者) 教員研修の浸透が保護者から見えない。教員自身が、ICTを活用するメリットを感じていないのではないか。時短になる、子供のためになる、自分のためになるというような、活用の動機付けはどのように考えているのか。

(司会) ICTを使ってみてはじめて、良さを実感している教員が多い。小グループに分かれて話し合いをする場面でのICT活用や、外部講師の講演をオンデマンドで受講できる、など体験して良さを実感している様子である。メリットを理解してもらえよう多種多様な方法で研修を実施している。

(参加者) 学校は、子供が毎日登校することが前提でプリント類が配付されている。不登校の子供の場合は、受け取りに行ったり、教員が届けてくれたりすることもある。紙提出しなければならないものであれば、受け取ってから記入して、さらに学校へ提出することになるため、少々面倒である。さくら連絡網にはアンケート機能があるので、もっと活用していただきたい。

(参加者) 私が学生だった頃、プログラムやパソコンの使い方は非常に大変だったが、この20年間でインターフェースがかなり楽になった。これからの科学技術の進歩で、インターフェースはもっと簡単になっていくことが想定される。学校の先生方をお願いしたいことは、今の最先端を追いかけても、子供たちが学校を卒業する頃にはもう最先端ではなくなるくらいのスピードで変化していくので、基本や本質をしっかり教えていただければ良いと感じている。

(参加者) ICT活用において可視化するメリットを教員は実感されていると思うが、例えば、一斉授業や反転授業の中で教師の役割自体に対する見解や、本質的な問題について、研修時にどのような問題提起をされているのか。

(教育センター所長) 実際の活用方法についての研修に追われているが、有識者からは、ICTの効果的な活用の在り方であったり、より良い授業をつくったりすることが本来の目的であることから、ICTを使うことが目的化しないようにという助言をいただいている。

(参加者) 有識者からの助言を受けるに留まっているということか。ICTを活用するという状況は、今までの教員の役割は転化していかなければいけないという部分もあると思う。そうでなければ、ICTを使う意味というのは今までの文房具と同じで、あまり意味がないと

感じている。なぜ ICT を使うか、使う意味は何なのかという根本的な問いが必要なのではないかと考えている。

(教育センター) ICT を道具として使う際には、授業構想がしっかりしていないと活用につながらない。また原点に帰って授業観の勉強に戻る。今まで付箋だったものを ICT 活用することで効率的に協働的に進められるが、根本は授業づくりが重要だと考えている。

(参加者) ICT の活用と授業づくりは別々の問題と考えているということか。

(教育センター) 別々ではなく、授業づくりの中に ICT 活用を取り入れていくということである。